

評価領域	進路指導
------	------

重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・「つながりプラン」を活用し、学び合いの学習活動を計画的かつ系統的に行うことで、キャリア発達を促し、就労意欲の向上につなげる。 ・職場見学・体験及び、職場実習の意義を周知するとともに、企業と連携し、生徒の実態に合わせた職場実習による生徒の進路決定に向けた効果的な計画を立案する。 ・「障害者の生涯学習」の充実に向けた活動の立案に向けて、関係機関と連携し、講座の充実と参加促進を図る。
------	---



現状	<ul style="list-style-type: none"> ・つながりプランは4年目の実施となり、プランは周知されているが、事前のねらい共有シートの記入など、ねらいを共有することの重要性をさらに周知する必要がある。 ・経験拡大に向けて複数事業所での職場実習を計画している。 ・学びの場の機会提供につながる講座開設に向けて、関係機関との連携を継続する。
----	---



具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらい共有シートの記入を通じて授業のねらいを明確にした事前学習や実際の活動、振り返りの計画的な実施 ・生徒の興味・関心に基づいた、複数の業種の見学や体験、職場定着に向けた継続的な職場実習の計画と実施 ・関係機関との連携による、青年学級の充実を目指した、大仙市教育委員会事務局生涯学習課との情報共有
--------	---



目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> ・ねらい共有シートの項目を見直し、事前の情報共有をスムーズに行う。 ・一般企業での職場実習を希望している生徒が、複数業種で経験を積めるように職場実習を計画・実施する。 ・青年学級で実施予定の講座について、関係機関と事前に参加体制や活動内容、会場について検討する。
------------	---



具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・例年実施されている卒業学年による作業学習見学や体験、清掃技術講習に加え、小学部と高等部農園芸班の花の苗植え講習や中学部による音楽科演奏会等の学習活動を行った。また、教育課程三部会の進路学習部会と連携し、ねらい共有シートの記入項目の整理を行った。 ・定期実習において、積極的に職場実習を計画・実施したほか、進路選択・職場定着に向けた夏季実習の実施と、週一実習を計画している。 ・大川西根公民館を会場に実施されたWESTフェスタにおいて青年学級茶道教室を開催した。その様子を、大仙市教育委員会生涯学習課職員が参観した。
----------	--

達成状況	<ul style="list-style-type: none"> ・つながりプランを活用し、事前に交流のねらいについて共有を図り、各学部間の交流の機会をもつことができた。その中で、高等部と小学部低学年との交流では、授業のねらいを明確にした事前学習を行い、児童生徒の「聞く」「伝える」などのスキルについて共通理解を深めた上で指導することができた。 ・長期（二週間）の職場実習を設定したことで、仕事の習熟度を上げるとともに、本人が職場に慣れることや、新たな課題が見つかるなどの成果が得られた。複数業種の経験は、より適切な進路選択の判断材料として、自己理解が進むことにつながった。 ・青年学級を地域施設で実施したことで、関係機関との連携による実践の好事例となった。
------	--



P

D

自己評価	(評価)	(根拠)	C
	B	<ul style="list-style-type: none"> ・「つながりプラン」が、職員に浸透してきており、実施した児童生徒の感想やねらい共有シートの評価から、学び合いの大切さや成長を実感することにつながったことが分かる。しかし、つながりプランを実施した学年・学級においても、年間指導計画に盛り込まれていない場合も見受けられるため、今後も計画的な実施を呼びかけていく必要がある。また、一つの題材について複数回交流することが少なく、活動の深まりに関して課題が残る。今後も廊下掲示を通じて職員が情報を得る機会を増やしたい。 ・長期（二週間）の職場実習を設定したことで、仕事の習熟度を上げるほか、本人が職場に慣れることや、新たな課題が見つかるなどの成果が得られた。複数業種を経験する意義や進め方について職員に対して継続的に周知していきたい。 ・年度当初より青年学級に関するスケジュールを大仙市生涯学習課と情報共有を図ってきたが、今年度は1度の講座見学にとどまった。次年度は講座実施会場の選択や進行に関わる相談など、積極的に連携していきたい。 	

↑
評価基準
↓

- A：具体的な活動がなされ目標を達成できた
 B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない
 C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

学校関係者 評価と意見	(評価)	(意見)	C
	B	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な活動が活発に行われている。 ・大仙市生涯学習課とのさらなる連携に期待したい。 ・「つながりプラン」が定着し、児童生徒同士の学び合いや一人一人の成長にもつながっている。 ・長期の職場実習により仕事の習熟度が上がるとともに進路選択や自己理解の機会も効果的に得られている。 ・青年学級については、関係機関（公民館）として、今後連携・協力していきたい。 	

自己評価及び 学校関係者評価 に基づいた 改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・「つながりプラン」の計画的な実施・評価の推進により学部間連携を一層深めることで、系統的で一貫性のあるキャリア教育の実践を目指す。 ・生徒の実態に応じた職場見学・体験、長期現場実習等の充実を図ることで進路選択の幅を広げるとともに、生徒の自己理解を促し適正な進路決定につなげる。 ・障害者の生涯学習の推進に向けて、関係機関と連携した講座開設を目指すとともに、青年学級への参加促進を図る。 	A
-----------------------------------	--	---

評価領域	センター的機能
------	---------

重点目標	関係機関との連携による日常的な情報共有と好事例の発信
------	----------------------------



現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害の多様化と保護者支援の必要性により、関係者間での支援方針等の共通理解が必要なケースが増えている。 ・ 地域の学校（園）からの相談では、適切な発達段階の見取りと具体的な指導例の提示が求められている。
-----	---



具体的な目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援内容や具体的な手立て、関係機関との連携の好事例について、地域の学校（園）に発信する。
--------	--



目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々なケースの具体的な支援の例を基に、園研修や特別支援学級実践研修で教材や実践例について紹介する。 ・ 地域の小・中学校における障害理解授業づくりの中で、本校での指導の工夫について写真を用いて紹介する。 ・ 交流及び共同学習において、意図的に関わりの場を設定することで児童生徒が実体験を基に障害理解を深められるようにする。 ・ 外部関係機関との連携会議等に積極的に参加し、福祉サービス等の情報を得る。
------------	---



具体的な取組状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 園研修（6回実施）、特別支援学級実践研修（協力校として7回参加）で、発達段階の見取り方や支援の具体的な手立てについて紹介した。 ・ 心のバリアフリー推進モデル地区における障害理解の推進事業（県事業2年目）のモデル校として、内小友小交流（通称ハローの会）との交流及び共同学習の推進を図った。また、連携協議会等の場でねらいや実施内容を整理・評価し、両校での共通理解を図った。 ・ 居住地校交流事前学習としての障害理解授業で、本校での学びの様子や学びやすさへの工夫について7回提示し、相手校児童生徒や教職員に紹介した。また、小学3年生の居住地校交流の事後学習としての障害理解授業では、学校現場でのバリアフリーやユニバーサルデザインを取り上げ、障害のある人の生活や障害のある友達との関わり方について主体的に考えられるように指導した。 ・ 大仙市地域自立支援協議会児童部会で得られた情報を、校務支援システムで周知し職員間で共有を図った。
----------	--

達成状況	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内での情報共有は全18回（学部会8回、ケース会関連8回、児童支援部会関連2回）、校外での具体的な支援例の提示は13回、障害理解授業での本校の学びやすさへの工夫の紹介は9回である。 ・ 交流及び共同学習を通して、両校の児童生徒が互いのよさを見つけたり、主体的に関わったりする姿が多く見られた。 ・ 内小友小交流では保護者参観を初めて実施したことで、内小友小学校保護者の障害理解が深まった。また両校保護者の交流及び共同学習への理解が広がり、交流を継続することの成果についての感想が寄せられた。
------	---



P

D

自己評価	(評価)	(根拠)	C
	B	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者に対する支援を重点とする困難事例の増加により、ケース会の主たる開催者がどの機関であるか整理が必要である。 ・交流及び共同学習の成果として、地域の小・中学校等の先生方から関わりが深まったという感想が寄せられている。実施内容や障害理解授業の授業づくりについては、両校の実態に即して引き続き検討する必要がある。 ・地域に発信した支援例が、学校（園）の実情に即したものであったか、また活用された例はあるか等の検証が必要である。 	

↑
評価基準

A：具体的な活動がなされ目標を達成できた

B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない

C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

↓



学校関係者 評価と意見	(評価)	(意見)	C
	A	<ul style="list-style-type: none"> ・他機関との連携によって十分な取組がなされている。今後も地道な活動の継続が大切である。 ・地域の小学校との交流及び共同学習の充実によって障害理解や共同学習の理解が深まった。また、保護者が参観することによって障害理解が深まった。交流は継続して行ってほしい。 ・センター的機能の充実を目指し様々な研修を行っている。事前の資料準備等を含めて先生方の負担軽減をができるように工夫してほしい。 	



自己評価及び 学校関係者評価 に基づいた 改善策	(評価)	(意見)	A
		<ul style="list-style-type: none"> ・今後も必要に応じた他機関連携やケース会議の開催等、困難ケースに柔軟に対応していく。 ・交流及び共同学習については、引き続き保護者参観の機会を設けるなど障害理解の推進を図るとともに、その取組状況を広く発信していく。 ・地域に発信した支援の好事例については、実態に即した有効な事例提供となっていたかを検証するとともに、事例に応じた具体的な支援の在り方についても改めて検討する。 	